

討論論文 1

社会的情報処理能力と社会的知識について

— 三島・諸井・相川論文へのコメント —

愛知学院大学 二 宮 克 美

「現代社会において対人関係能力の低下が見られる」との問題意識の下で、3名の話題提供者のお話をうかがった。シンポジウム当日に、私が指摘した点は、つまるところ社会的情報処理能力の発達という視点ならびに社会的知識の概念化の2点である。この2点について、少しコメントをすることで討論論文にかえたい。

1. 社会的情報処理能力

三島論文で提起された「もめ事解決力」は、インフォーマル集団の成員の“問題行動”を解消したり、集団内のもめ事を自分たちの力で解決したりすることとされている。そして、「もめ事解決力」が育たない原因として、遊び場面で生じる問題の切実感の低下と、異年齢の子どもたちが交流する機会の減少をあげている。こうした子どもたちへの日常的な観察や調査から得られたボトムアップ的発想は貴重である。

諸井論文では、親密な関係を築くために必要な対人技能として、Buhrmesterら(1988)の分類を引き合いに出し、a) 開始、b) 否定的主張、c) 開示、d) 情動的支援、e) コンフリクトの処理の5領域について述べている。コンフリクトの処理については細かくふれられていないが、対人関係の進行にもなって、この技能は大きな意味を持つてくると言えよう。

ところで、子どもたちが示す社会的な行動は、対人関係場面で直面するさまざまな問題について、その子どもなりの解決の結果としてあらわれた反応であるといえる。Dodge(1986)は、こうした社会的場面における問題解決についての情報処理モデルを提出している。そこでは、符号化→表象(解釈)→反応探索→反応決定→実行という5つのステップがあり、あるステップでうまく反応できなかったり偏ったやり方で反応すると、社会的行動がうまく発揮できないとする考え方である。つまり、社会的問題場面に直面したとき、それぞれの子どもの情報処理のパターンに差があり、それがその子どもの実際の社会的行動を決定していく。さらに、その子どもの社会的行動は、その子と接する仲間の情報処理過程に影響していく、という具合に、子どもとその仲間の社会的行動には、それぞれの情報処理過程を媒介した連鎖関係があるというものである。

それぞれ5つの過程について、手短かに解説しよう。

- ①符号化過程：ある社会的問題解決場面では多くの情報が同時に存在する。その問題を解決するのに必要な適切な手がかりに選択的に注意し、それを入力する必要がある。
- ②表象(解釈)過程：符号化した手がかりを過去経験にもとづく記憶や知識と統合して表象し、その意味を解釈し、理解する過程。
- ③反応探索過程：相手に返すための適切な反応を見つける過程で、社会的行動に関するルールの知識や過去経験などの長期記憶といった自分のデータベースの中から、反応を探索する過程である。
- ④反応決定過程：自分がとろうとする反応が、どのような結果を生み出すのかという結果の評価を行い、いろいろな反応の中で最適な反応を決定する過程。

- ⑤ 実行過程：その場面に応じた言語的、動作的技能を含む行動の手順についての知識（スクリプト）にもとづいて、行動が実行される過程。

この5つの過程は、循環的なものである。社会的相互作用の中で、子どもは自分の行動の効果を見つめなければならない。もし自分の行動が望ましい効果をもたらさない場合は、別の情報を取り入れる必要がある。社会的行動は、社会的問題解決の結果であるとするこの考え方は、その問題解決過程で生じている情報処理を重視したものである。

この他にも、「もめ事解決力」に関連するものとして、Selman & Yeats (1987) の提起した対人交渉方略 (Interpersonal negotiation strategies) がある。対人的場面で不均衡が生じたとき、どのように対処するかを規定するものとして、相手は何を考えた望んでいるのかわかる、自分がこうすると相手はどう思うか、状況はとなると予測できるかなど状況の解釈や行動の結果の予測といった社会的認知要因がある。Selman は、相手の立場に立って考える能力、あるいは自他の要求や考えを理解し、それらに関係づける能力の発達について理論化し、その発達のレベルによって対人的葛藤への対処の仕方が異なるとしている。4つの段階（段階0～3）を提起しているが、双方が納得できる解決をする段階3こそが、「もめ事解決力」の目指すものなのかも知れない。

「もめ事解決力」について、こうした情報処理の観点や認知的要因を考慮した先行研究を参照しながら、具体的に明確化していくことが望まれよう。

2. 社会的知識の概念化

相川論文の中で、対人関係能力の低下に関して3つの仮説が提起され、「価値観の多様化が進み、集団規範による拘束力が弱まり、一人一人の行動が個人の判断に基づいて行われるようになった」という指摘がある。さらに、「集団規範の拘束力が強い時代では、各個人がいかに行動すべきかは規範が指示していた。どのような場面で誰が何を言い、どのように振る舞うかは、決まっていたのである。……また、役割に基づく言動にも自ずと決まりがあった」と指摘している。そして、「現代は中途半端な個人主義が浸透し、集団規範の拘束力が弱まってきた。……各人は、それぞれ自分の判断で、どのように振る舞い、どのようなものの言い方をするべきか決定しなければならない」と述べている。

ところで、われわれが対人関係を円滑に営む時に、各自が決定し守らなければならない規範、ルールとはどんなものなのであろうか。嘘をついてはいけない、人を傷つけてはいけない、いじめをしてはいけない、年上の人には敬語で話さなければいけない、食事の前には手を洗わなければならない、などあげだしたらきりが無い。

Turiel, E. (1983) は、社会集団内の相互作用には3種類の法則があり、社会に適応していくためにはそれらの法則にそった3種類の知識が必要になると考えている。その3種類の知識とは、道徳 (moral)、社会的慣習 (social convention)、個人 (personal) と呼ばれている。道徳とは、他者の権利や福祉、信頼、公平に関係したものである。嘘をついたり、いじめをするなどの道徳的に逸脱した行為は、常に悪いと判断される。社会的慣習とは、社会集団に参加している成員間の関係を調整する行動上の取り決めに関係したもので、挨拶、服装、食事のマナーなどで、文化や状況に相対的なものである。行為自体に善悪を規定する性質はないが、集団の成員の合意が必要であり、個人で決定することはできない。個人領域は、自己と他者の概念化に基づいて構成されるもので、行動の影響が自分だけにあり、自己の統制下に置かれる行為が含まれる。

自分や他者が「どのように行動すべきか」という対人的な葛藤場面に直面したとき、自己、他者、社会集団などさまざまな観点から個人の意思決定について考えることになる。こうした社会的思考は3つの知識領域ごとにある程度独立して発達するとされている (表1参照)。

ところが、社会集団の中で生活している以上、単純に道徳や慣習、あるいは個人の問題として片づけられるものは少ない。具体的な状況における個人の行動は、道徳、慣習、個人の各領域からの判断が調

表 1 道徳、慣習、個人概念の発達段階 (Smetana, 1982 より)

道徳	段階 1	罰と服従への志向
	段階 2	道具主義的な相対主義志向
	段階 3	対人的同調志向, あるいは「良い子」志向
	段階 4	法と秩序志向
	段階 5	社会契約的な法律志向
	段階 6	普遍的な倫理的原理志向
慣習	段階 1	行動上の一様性を描写したものであるものとしての慣習の肯定
	段階 2	行動上の一様性を描写したものであるものとしての慣習の否定
	段階 3	具体的な期待や規則が随伴するものであるものとしての慣習の肯定
	段階 4	規則体系の一部としての慣習の否定
	段階 5	社会システムによって媒介されたものであるものとしての慣習の肯定
	段階 6	社会的規範としての慣習の否定
	段階 7	社会的相互作用を調整するものであるものとしての慣習の肯定
個人	段階 1	物の所有や身体的特徴に基づいた個人 (自他) の定義
	段階 2	行動特徴や明確な役割に基づいた個人 (自他) の定義
	段階 3	思考, 感情, 意思を持った存在としての個人 (自他) の定義
	段階 4	統一された自己概念を持った者としての個人 (自他) の定義
	段階 5	自己概念を価値ある方向へ変容する決定者としての個人 (自他) の定義

整された産物である。ある特定の社会的行動を予測し説明するためには、その状況における道徳的な判断、慣習による判断、個人的な判断という3つの知識領域の社会的思考を考慮し、各領域の思考がどのように調整されるかを見る必要がある。たとえば、「友だちが大怪我をしたため急いで先生を呼びに行かなければならない」という事態を想定してみよう。「友だちを助ける」という道徳的行動と「廊下は静かに歩く」という慣習的行動が関係している。「規則を守ることよりも人の命の方が大切」と判断し、廊下を走ってでも先生を呼びに行く子どもの場合、慣習よりも道徳に重みづけて判断するという領域調整をしたことになる。

対人的な葛藤や意思決定に際して、われわれはいろいろと考え悩むことになる。その内面的な思考は、見方を変えると、道徳、慣習、個人領域ごとの思考であり、またその領域調整なのである。ここではこれ以上この領域調整の問題にふれないが、詳しくは Smetana (1995)、Tisak (1995) や Turiel (1997) を参照していただきたい。

さまざまな問題に直面したとき、3つの知識領域において自分自身で判断し、領域調整し、意思決定することが、自律的な社会的行動につながるのである。相川論文では、「『あれもいい』『これでもいい』と、相互に相手の違いを受け入れつつ協調しなければならない。その結果、各個人には、複雑で高度な対人関係能力が求められるようになった。対人関係に関する基本的な知識だけでなく、柔軟に応用をきかせたスキルを持ち合わせていないと、対人関係が維持できない」という指摘がなされている。3種類の知識にもとづいた領域判断ができるように、複雑な事態ではより多くの観点から判断・調整ができるように、子どもの社会的思考の発達を高める必要性を示唆しているものと考えられよう。

最後に蛇足ではあるが、相川論文の中で「～核家族化が進んでいる。少子化が進み、きょうだい数が減少した」という指摘がある。確かに社会全体では子どもの出生数が減少しており、少子化の傾向がある。しかし、厚生省の「出生動向基本調査」によれば、平成4年で全体の半数以上の夫婦が2人以上の子どもを持ち、4分の1ほどの夫婦が3人の子どもの持つという家族の構成や規模には、この15年間ほとんど変化は見られていない。また、子どもの兄弟姉妹数についても、同様に大きな変化はない。さら

に、最近15年間の青少年がいる家族の構成について考えてみた場合、核家族で育つ青少年の方が祖父母のいる三世代同居の家族で育つ青少年よりも多いことは事実であるが、必ずしも核家族の割合が増加（核家族化）しているわけではない（青少年白書、1994による）。事実の確認まで。

3氏の論文を読んで、2つの点にしぼってコメントしてきた。この他にも重要な論点があろうが、いずれにせよ「対人関係能力の低下」というよりも「対人関係能力の未発達や発達不全」が問題と思われる点がある。社会的知識の概念化（道徳、慣習、個人領域の領域調整）に関する研究は、わが国ではほとんどなされていない。こうした研究も含め、さらなる研究の積み重ねを期待している。

文 献

- Dodge, K. A. 1986 A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter (Ed.) *The Monnesota symposia on child psychology, Vol.18.*, Pp 77-125. NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 中澤 潤 1995 問題解決としての社会的行動 二宮克美・繁多 進（執筆代表）『たくましい社会性を育てる』 Pp 115-132. 有斐閣選書
- 二宮克美 1996 社会性の発達と評価 『指導と評価』 第42巻 第11号 Pp 7-11.
- Selman, R. L. & Yeates, K. O. 1987 Childhood social regulation of intimacy and autonomy: A developmental-constructionist perspective. In M. Kurtines & J. L. Gewirtz (eds.), *Moral development through social interaction*. Pp 43-101. NY: John Wiley & Sons.
- 首藤敏元 1995 道徳性と社会性の発達 二宮克美・繁多 進（執筆代表）『たくましい社会性を育てる』 Pp 83-98. 有斐閣選書
- 総務庁青少年対策本部（編） 1994 平成5年度版 青少年白書 大蔵省印刷局
- Smetana, J. 1982 *Concepts of self and morality: Women's reasoning about abortion*. NY: Praeger.
- Smetana, J. 1995 Morality in context: Abstractions, ambiguities and applications. In R. Vasta (Ed.), *Annals of Child Development, Vol. 10*. Pp 83-130. London: Jessica Kingsley Publishers.
- Tisak, M. 1995 Domains of social reasoning and beyond. In R. Vasta (Ed.), *Annals of Child Development, Vol. 11*. Pp 95-130. London: Jessica Kingsley Publishers.
- Turiel, E. 1983 *The development of social knowledge: Morality and convention*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Turiel, E. 1997 (in Press) The development of morality. In W. Damon (Ed.) *Handbook of Child Psychology, 5th Ed., Vol. 3: N. Eisenberg (Ed.), Social, emotional, and personality development*. NY: John Wiley & Sons.
- [Turiel から二宮あて手渡された First draft による]